
私は決めた、あのジジイをぶん殴ってやると。

メネ@未確認

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は決めた、あのジジイをぶん殴ってやる。

【Zマーク】

Z4690V

【作者名】

メネ@未確認

【あらすじ】

変な苗字の女の子は祖父を襲んだ。

* といつおはなし。

クラス中から浴びせかけられる笑い声の中、私は激しい憤りを感じていた。ただその矛先は、クラスの皆ではない。そこのところよろしく、と誰かに向けて言つてみた。

私は俯いたままこぶしを握り、そして周りの誰にも聞こえないよう小さく、且つ周りの誰よりも低い声で、つぶやく。

「あの、嘘つきジジイめ

いつの間にか、私の唇は痙攣を起こしていた。

私の苗字はオミオといつ。

オミオという字面だけでも十分珍妙な珍名なのに、漢字の表記が御御御という、普通に見たなら目を疑うような当て字だった。私は小学六年生だが、今まで受け持つてくれた先生は誰一人としてこの苗字を読めなかつた。というか先生でなくても読めた人はいなかつた。

まあ注目を浴びるから友達は作りやすいけど、と幼いながらも考えてみる。

それに、私はこの苗字を気に入っていた。

その理由として、以前私が祖父に向けて苗字について尋ねたとき

「ねえ、おじいちゃん

「あん？ どうしたかい」

「あのね、ね、どうしてオミオって苗字なの？ オジィちゃんが変えたつて、おかんが言つとつたの」

「そりやあなあ、長くなるけど、ええか？」

「うん、いいよ」

もう言つてから一度味噌汁を啜り、祖父は話し始めた。

「昔はな、大きいの字に、御の字に、雄つてので、オミオつて苗字だつたんよ」

「ふうん、それで？」

「だがよひ、雄つちゅうたら、男つて意味やろ」

「そうよねえ。雄牛は、何がなんでも男やもんねえ」

「やうひ。じやけん、わしはそんな名前、おかしいって姉貴に言つた。そんなら姉貴が、『じゃああなたがええ名前を考えんさい』と返してきおつてな」

「あ、おばーちゃん？ かつこにいわあ」

「ふん、何がかっこええじや。あんなババアが」

「やけど、おじいちゃんだつてジジイよ？」

「ええわええわ、そりやどうでもええ」

また祖父は味噌汁を吸つた。

ちなみに祖父は味噌汁が大の好物で、朝晩はもちろんのこと、この間はフランスパンと一緒に食べていた。曰く美味しいそつだけど、絵で見るとおかしそつだ。

「そんでな、わしゃあ一晩考えた。そいで思いついたんが、この字や。御の字を三つ並べて、オミオ」

「寝てる時に頭でも打つたん？」

「アホか。……あんな、この字には、意味があるんじや」

「どんな意味なん、これ？」

「御つてのはよ、まあ『尊敬』つけめつ意味がある。これにの、『やる』ことなすこと全てを尊敬されるよつに』つて思いを込めた」

「思こやつて、センスを込めて欲しかつたわ」

「ひつせえ。次によ、『女性を親しむ』つて意味から、『誰からも親しまれるよつに』と解いた」

「女性はどりに行つたん？ 黄泉の国？」

「黙つとれ。で、最後に、『丁寧』だとか『上品』がある。そんで、『上品に生きられるよつ、見られるよつに』つつの意味にした。どうや、ええ名前やひつ」

「聞いたらねえ。でも、普通には分からんよ」

「そんなのはええ。お前がそういう風に生きてくれりやあ、ジジイとしてこれ以上嬉しいことはないわ」

「……あ、自分でジジイ言つた」

「やっぱ黙つとれ、お前」

「はあー、はいはー」

とこつやつとりがあつた。当時小学一年生だったから、なんともふざけた対応をしているのだけど、まあ今考えれば凄い苗字だなあと思うのだ。

『尊敬され』、『親しまれ』、『上品になれ』、という素晴らしい意味が込められていてるなんじ、おそれくこの御御御といつ名前しかないだろ？

昔は祖父のことを軽く馬鹿にしていたのだが、今では尊敬している。親しみもある。……上品かどうかは少し答え辛いが、祖父はちゃんと苗字を体現してくるなあと想つ。

まあそんな訳で、私はこの苗字を嫌つてはいない。

……それはそつと、今日は調理実習で味噌汁を作る」となつて

いた。

知つての通り、私の祖父は味噌汁が好きだ。だから、今日は帰つて、習つた味噌汁を作つてあげようと予定している。上手く作れるといいのだけど。

「はい、じゃあ皆さん、今日は味噌汁を作りますよ」

美人で有名の家庭科担当の先生が、はきはきとした声で言つた。クラスの皆が歓声をあげる。私もそれに混じつた。

「でもその前に、ちょっとだけ味噌汁について勉強しましょう」

今度はさつきとは反対に、残念そうな声があちこちから聞こえてくる。

もし美人先生でなかつたら、もう暴動になつているんだろうなあと考えつつ黒板眺めた。

黒板に書かれた文字を見て、何人かの生徒が「ん？」と小首を傾げる。私も傾げている。

何も知らない先生は、その文字を書き終えると、振り返つて話を始めた。

「はい、この名前、なんだか分かりますか？ 実はこれ、味噌汁の別の名前なんですね！」

直後

調理室で、爆笑が生まれた。

(後書き)

お題小説【変な苗字】です。

たぶん推敲予定。

感想・批評・誤字脱字報告など、あつましたらどうぞ。

(・・)メネ わざとです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4690v/>

私は決めた、あのジジイをぶん殴ってやると。

2011年10月8日06時45分発行